HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英語の態の対立と意味 : 文法の語用論との相互作用による説明
Author(s)	大竹, 政美
Citation	教授学の探究, 7, 65-68
Issue Date	1989-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13559
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_p65-68.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

英語の態の対立と意味

——文法の語用論との相互作用による説明——

大　竹　政　美
（北海道大学大学院教育学研究科博士課程）

われわれは，学校教育の一環を成す外国語教育としての英語教育の教育内容体系が，文法の知識を形成する領域と語用論の知識を形成する領域という二大領域から構成される，と想定している。文法の知識を形成する領域においては，その教育内容の本性を理解するのに有意義である限りにおいて，文法の形式的な説明に固執してはならない。語用論の機能的な説明が利用可能であるならば，それを用いるのをためらうべきではない。文法に「浸透」している限りにおける語用論（Leech 1980：26〔リーチ 1986：39-40〕）が，文法の領域に属するその教育内容に即して，問題にされるのである（大竹（1989）を参照されたい）。

英語の受動態は，「〔文法の〕規則と〔語用論の〕原則の間の分業」を例証している。つまり，

> 文法と語用論の両方が共謀して，受動態の説明を提供する。前者は受動態がいかにして形成されるかを説明し，後者は受動態が対応する能動態よりも好まれそうな条件を説明する。
> 〔Leech 1983：22〔リーチ 1987：29〕〕

したがって，

> もし，能動態と受動態の書きかえのルールだけ教え，しかも，両者の意味はかわらない，ということですましていると，そもそも，二通りの構造があるということについてその存在意義さえ理解させることができない。〔毛利 1982：12〕

たとえば，次のような「能動-受動の対」を取り上げてみよう。

(1) a．David killed Goliath.
　　b．Goliath was killed by David.

これら二つの文は「正確に同じ真理条件を持っている」，すなわち，「一方を真とし，もう一方を偽としうるような事態はない」。それらは「知的に同義である（あるいは同じ知的意味を持っている）」と言える。しかし，「ある意味」では，これらは「意味が異なる」かもしれない。というのは，「〔普通の音調のもとでの解釈では，〕〔(1 a)〕はダビデ『について』であり，〔(1 b)〕はゴリアテ『について』である」から，それらは「強調などの点で異なる」かもしれない（Akmajian and Heny 1975：238）。つまり，（1 a）と（1 b）のような，対応する能動文と受動文は，〔普通の音調のもとでの解釈では，〕「何について何を語るか」という，「主題」-「題述（主題について情報を与える部分）」の構造が異なる（毛利 1982：12-13）のである。

ここで，「受動態と数量詞（quantifier）の作用域（scope）」の問題を考えてみよう。

(2) a. Everyone in the room knows at least two languages.
b. At least two languages are known by everyone in the room.

Chomsky (1957) は，「それぞれ単一の解釈を持った〔(2 a)〕と〔(2 b)〕を生成して，もう一つの解釈も文脈に入りうるという事実を無視」している，という (Newmeyer 1983: 59)。

> われわれは，普通の解釈のもとでは，〔(2 a)〕のような「数量化」(quantificational) 文が真であることがあるのに対して，対応する受動文〔(2 b)〕が偽である——たとえば，その部屋にいるある人はフランス語とドイツ語しか知らず，またある人はスペイン語とイタリア語しか知らないという場合——状況を記述することができる。このことは，最も弱い意味的関係（事実的同値）でさえ，能動態と受動態の間に一般に当てはまるわけではない，ということを示している。〔Chomsky 1957: 100-101〕

ただし，Chomsky (1957) が，「普通の解釈のもとでは」という言葉づかいをしていることに注意されたい。「最も普通の解釈」のもとでは，two languages は，(2 a) では，「(どのような組み合わせでもよい任意の) 2か国語」であり，(2 b) では，「(特定の) 2か国語」を意味する (安井 1988: 144-145)。それに対して，Katz and Postal (1964) は，「それぞれ両方の解釈を持った〔(2 a)〕と〔(2 b)〕を生成して，一方が他方よりも好まれるという事実を無視」している，という (Newmeyer 1983: 59)。

> 〔チョムスキー〕は，〔(2 a)〕では，相異なる人たちが知っている言語が両方とも異なりうるのに対して，〔(2 b)〕では，それが，それぞれの人について同じ二つの言語である，と論じている。
> しかしながら，これらの例は説得力がない。事実は決して明らかではないが，能動態〔(2 a)〕は，受動態〔(2 b)〕に帰されたのと同じ解釈を受けるように思われるし，逆に，受動態は，能動態に帰されたのと同じ解釈を受ける。〔Katz and Postal 1964: 72〕

Newmeyer (1983) によれば，「事実」は，「両方の文は，両方の読み (readings) を持ちうるのではあるが，相異なった，より好まれる読みを持っている」ということである。このような，「多重の数量詞を持った文の解釈を取り巻く事実」は，「文法の，文法外の体系との相互作用」によって，説明されるであろう。つまり，

> 文法は，両方の読みを持った両方の文を生成し，語用論は，それぞれの文について，なぜ一方の読みがより好まれるかを説明する。〔Newmeyer 1983: 59〕

のである。「枝分かれ構造 (tree-structures) を左から右へ解析 (parsing) する際の人間の記憶容量に対する制約」(Leech 1983: 66〔リーチ 1987: 91〕) のためであろうか，われわれには，「文の中の最初の数量詞を，より広い作用域で解釈する傾向」がある (Newmeyer 1983: 59)。

実は，「数量詞の作用域というのは，数量詞の種類によっても異なる」が，(2)について言えば，「最も普通の解釈」のもとでは，

> 二つの数量詞のうち左側にあるもののほうが，より広い作用域をもつ。作用域の広狭を〔不等号〕で表せば，〔(2 a)〕の場合はeveryone＞twoであり，〔(2 b)〕の場合はtwo＞everyoneである。それなら，より広い作用域をもつというのは，意味解釈上，どのような機能をもつものであろうか。意味解釈の際，より広い作用域をもつ語は，それによって指し示されるものが「先に固定され」，それに応じて，より狭い作用域をもつ表現によって指し示される個体の解釈が行われる，というように考えることができるであろう。〔(2 a)〕の場合であれば，everyoneがまず固定され，その各構成員に応じて，自由に，two languagesの〔値〕が決まるのに対し，〔(2 b)〕では，まずtwo languagesが固定され，それにeveryoneが対応するという形になる。〔安井 1988：145〕

一般に，「否定演算子(negative operator)や数量詞のような論理的演算子(logical operators)は，それらの作用域の内部にある要素(他の論理的演算子も含む)に，後続するというよりは，先行する」。この「末尾作用域の格率」(End-scope Maxim)は，「意味表示のレベルにおいて，右に向かって括弧づけがより深くなっていることをより好む」(Leech 1983:65-66〔リーチ 1987：90-91〕)。

今度は，次のような「能動-受動の対」を考察してみよう。

(3) a. Beavers build dams.
　　b. Dams are built by beavers.

この対は，「主題」-「題述」の構造のちがいを教えるのに絶好の例である(毛利 1982：12)。

> 原則として——つまり，特別の場合という表示がない限り——主語は主題であるから，〔最も自然な解釈では，〕〔(3 a)〕はビーバーについてその習性を述べたものであり，〔(3 b)〕はダムというものについて，それは何者が作るかを述べたものである。そうなると，〔(3 a)〕は「人間もダムを作る」ということと抵触しないけれども，〔(3 b)〕は明らかにこれと抵触する。それで〔(3 a)〕と〔(3 b)〕とは同じ意味ではないことがわかる。
> 〔毛利 1982：13〕

ここで注意しなければならないのは，これらの例にも，「数量化」(quantification)の問題が関与している，ということである(Chomsky 1975：98〔チョムスキー 1979：146〕)。Chomsky (1977)によれば，(3 a)と(3 b)のような「不定総称文」(indefinite generics)の場合には，

> (普通の音調のもとでの)解釈では，主語にかかる普遍数量詞(universal quantifier)がどこかに潜んでいる。前者は，すべてのビーバーが，この能力を行使しようとしまいと，ダム作りをするもの(dam-builders)であるということを述べている。後者は，すべてのビーバーについては何も言っていないし，前者は，すべてのダムについては何も言っていない。〔(3 a)〕

は，たとえ大部分のビーバーが一度もダムを作ったことがないとしても，真であるが，〔(3 b)〕は，その自然な解釈のもとでは，ビーバーによって作られるのではないダムもあるから，偽である。〔Chomsky 1977: 30〔チョムスキー 1982: 41〕〕

参 考 文 献*

Akmajian, Adrian and Frank Heny. 1975. *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.

———. 1975. *Reflections on Language*. New York: Pantheon.〔N. チョムスキー『言語論——人間科学的省察』，井上和子・神尾昭雄・西山佑司（訳），大修館書店，1979.〕

———. 1977. *Essays on Form and Interpretation*. New York: North-Holland.〔ノーム・チョムスキー『形式と解釈』，安井稔（訳），研究社出版，1982.〕

Katz, Jerrold J. and Paul M. Postal. 1964. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Leech, Geoffrey N. 1980. *Explorations in Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins.〔ジェフリー・N. リーチ『意味論と語用論の現在』，内田種臣・木下裕昭（訳），理想社，1986.〕

———. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.〔ジェフリー・N. リーチ『語用論』，池上嘉彦・河上誓作（訳），紀伊國屋書店，1987.〕

毛利可信. 1982.「英語教師の文法研究」，『英語教育』30. 12, 12-14, 大修館書店.

Newmeyer, Frederick J. 1983. *Grammatical Theory: Its Limits and Its Possibilities*. Chicago: The University of Chicago Press.

大竹政美. 1989.「コミュニケーション文法としての教育英文法——英語の態への適用——」，『北海道大学教育学部紀要』52, 129—144.

安井稔. 1988.『英語学史』，「現代の英語学シリーズ〈第7巻〉」，開拓社.

注* 訳文は，必ずしも邦訳に従っていない。